

育つことを信じて待つ

ハチ公前と言えば、言わずと知れた待ち合わせ場所の代名詞です。昭和の終わりには、「わたし待つわ♪」のフレーズで大ヒットした歌もあり、日常生活において待つことがそれほど苦ではない時代がありました。その典型的なものが待つことを楽しむ手紙だったと思います。

小学4年生の時でした。仲の良い友だちの引越しをきっかけに初めて手紙を書きました。便箋を前に何を書いてよいかもわからず、「将来、お店の看板や銭湯の壁画を描くような職人になりたい。」と想いを込めて手紙をしたためた記憶があります。二週間後、「君は、プロ野球の選手になるんじゃないのか？夢を簡単にあきらめるなよ。」と書かれた返信を見て、親密な関係性が崩れてしまうのではないかと不安になり、「絵に興味があってさ、先日もコンクールで準特選となったんだよ。」と弁明の返事を送りました。すると一か月後に、「絵が好きだったんだね、知らなかったなあ。」と今度は私の夢に理解を示すような言葉で綴られた手紙が届きました。しかし、その頃にはまた野球が楽しくなっていて、「やっぱり野球選手になることにした。」と返しました。この僅か3、4回ほどの手紙のやり取りは、なんと半年の時間を費やしていましたが、情緒的關係で結ばれた友だちの存在は、学校から家に帰ると必ず玄関扉の中央にある郵便受けを覗き込んで、「まだかなあ」と手紙の到着を待つ嬉しさでもありました。今ならラインで「将来、絵描きになりたいんだけど君はどう思う？」既読、「え、そうなの？」既読、「なぜ夢をあきらめたの？」既読、「やっぱり夢は変えないで野球選手になる！」既読。

これまでのような時間をかけたやり取りは考えられないでしょう。それどころか、多くの人が中々既読の付かないレスポンスの遅さに苛立ったり、不安になったりするのを聞くと、待つこと自体が不便さを強調してしまうからなのでしょう。気が付くと、喫茶店での待ち合わせや駅改札口の伝言板など、待つことが前提にあった情景が消えつつあります。手紙の返事を待つための時間も、期待をしつつも不安を抱く、この相反する思いが心の成長を促していたと思います。待つことで生み出される大切な価値が失われていると感じずにはいられません。

教育の世界を見てみると、今や学校では、少しでも早く生徒の進むべき方向性を支援したり、いち早く必要な情報を収集したりすることが教師の大きな役割となりました。例えば、大学受験対策として早い時期からの準備は、結果的に早い成長を求めざるを得ない現状があります。

でもよく考えてみてください。一本の大木に育てたいのであれば、数十年、数百年の時を待たなくてはなりません。野菜や果物、味噌やお酒も、発酵や熟成がなければ、製品とはなりません。教師の日々の指導も、早く成績が良くなることばかりに目を向けるのではなく、「育つのを待つ」視点で将来を見据え、生徒の成長を信じて指導を積み重ねていくことが必要となります。

なぜならば、不安と期待の中でも成長した生徒以上に、成長する生徒と共に歩むことが教師としての喜びだからです。これらを踏まえると、本校の建学精神である大器晩成は、「待つことができない社会」となった今こそ、待つことの大切さをもって生徒と向き合い、寄り添い続けることなのではないかと思います。

令和6年1月28日(日)、本校柔道部が講道館で開催された新人戦に挑んでいました。顧問の先生いわく、「柔道の力はまだまだですが、直向きな姿勢は、誰にも負けていません。」と力強く吐露してくれました。高校生活は僅か3年間です。指導者が短期間で練習の成果を求めてしまうのは、やむを得ないことでしょう。

しかし、顧問の言葉は、理想ばかりを追い求めることなく、日々の稽古を積み重ね、育てている以上に「育つのを待つ」覚悟の表れだと確信しました。会場では、成功なくとも成長することをひたすら待ち続ける顧問の熱い視線が学びの匂いとなって、試合に臨む生徒の姿を見守っていました。

令和6年2月

